坂下南小学校
学校だより
NO. 133
R7. 6. 2
(文責:校長 菅家 篤)

みなみの風

ドリーム＆チャレンジ！ ～あいさつ・はっぴょう・なかまとじぶん～

「チーム担任制」 ～緩やかに実施してまいります～

先日、「チーム担任制」について、お便りでお知らせしたところですが、本格実施に向けて、下記のように緩やかに実施していくこととします。

６月･･･毎週水曜日のみ１組と２組の担任が入れ替わります。

７月･･･毎週火・水曜日のみ１組と２組の担任が入れ替わります。

なお、８月以降については追ってお知らせいたします。

英語暗唱「ヒール・ザ・ワールド」

3･4 年生が合格！

先週木曜日、暗唱チャレンジの英語課題「ヒール・ザ・ワールド」に３年生と４年生の男子が挑戦し、見事合格しました。（右写真）中学年の子どもたちが頑張っていますね！

悔しくて泣く

暗唱にチャレンジする子どもたちが、毎日校長室を訪れます。１回で成功する子もいれば、途中で続きが言えなくなり、再度チャレンジする子もいます。中には、なかなか成功できずに悔しくて涙を流す子もいます。**私はその様子を見た時、「いい姿だな」と思いました。**最近の子どもたちは、ちょっと難しい問題にぶつかると、すぐにあきらめてしまいがちだと言われていますが、「できなくてもまあいいか」などと安易に考えない気持ちが「悔しくて泣く」姿から強く感じられたからです。

失敗を乗り越える力が大切

暗唱に見事合格した１年生

暗唱にチャレンジしたあなた。チャレンジすることであなたは大きく成長しています！

私自身の過去を振り返ってみると、成功体験よりも失敗体験の方が圧倒的に多いと言わざるを得ません。これは、スポーツにも言えることだと思いますし、スポーツに限らず、芸術など一般に共通して言えることだと思います。試合やコンクールにおいて優勝すること、１位になることが、最終の成功体験だと考えると、たとえ決勝まで残ってもそこで負ければ、これは失敗体験となります。つまり、成功体験を味わうことのできる者は極めて稀であることがわかります。このことから、自分の夢や希望が思い通りにならないこと・・・、そうしたことは少なくないし、それが人なのだと思います。とすれば、子どもの頃から負けに強い人間、失敗に強い人間として育てること、つまり、**「子どもから困難を取り除いてやるのではなく、いかにして失敗と付き合い、困難に打ち克つ力をつけてやれるか」が大切だと思います。**

子どもたちには、なかなか思うようにいかない暗唱へのチャレンジを通して、たくましく成長してほしいと願っています。

裏面に心温まるエピソードを掲載しましたのでご覧ください(*^o^*)

あるファミレスで・・・

　ある四人家族がいました。夫婦と二人の子ども。一人は１０歳の男の子、もう一人は８歳の男の子でした。１０歳のお兄ちゃんは、重度の食物アレルギーで、食べ物が好きに食べられない状態でした。

　ある日、弟が学校でいじめられて帰ってきました。その理由は、「僕だけファミレスに行ったことがないから、仲間外れにされた」とのことでした。実は、お兄ちゃんの食物アレルギーのため、弟はファミレスに１度も行ったことがなかったのです。ショックを受けた母親は、弟をファミレスに連れて行くことにしました。

　そして、ある日家族四人でファミレスに行きました。すぐに店員が注文を取りにきました。母親は店員に、「日替わりランチ二つと、お子様ランチを一つ下さい。」と頼みました。すると、店員は、「お子様ランチ一つですか？」と尋ねました。母親は、「はい、下の子がファミレスに行ったことがないことでいじめられて…。１度ぐらいはと思って連れてきたんです。と言うのも、上の子が食物アレルギーで食べる物が制限されているんです…。さらに失礼なお願いなのですが、上の子には家から持ってきた、これをここで食べさせてもかまわないでしょうか？」と、母親はかばんから食材の入ったタッパーを取り出しました。

　当然ファミレスに食べ物を持ち込むことは、食中毒などの問題により、本当はダメだということは母親にも分かっていました。店員は、「そうですか…。」というと、「私にそのタッパーを渡してください。」と母親に言いました。母親は、やっぱりダメか…、と落胆しながら店員にタッパーを渡しました。

　しばらくして両親が頼んだ日替わりランチ二つと、国旗が付いているお子様ランチが出てきました。弟は喜んでいますが、両親は素直に喜べませんでした。ですが、次の瞬間、もう一つの料理が出てきたのです。それはまぎれも無く、あのタッパーの中の料理でした。綺麗に盛り付けされ、真ん中には国旗が付いています。
　「はい、これがお兄ちゃんのお子様ランチだよ。」その店員の思いがけない言葉と嬉しそうに喜んでいる兄弟の姿を見て、両親は涙が止まりませんでした。

　心がほっこりするエピソードですね。

　子どもたち、そして私たち大人も、こんな心づかいができるハピネスクリエーターになれたら、坂下南小に“愛の花”がいっぱい咲くことでしょう。